

# クラーク室内管弦楽団

第41回演奏会

## スプリングコンサート



2017年4月21日(金) 19:15 開演

北海道大学クラーク会館 講堂

入場無料



プログラム

J. ブラームス (1833-1897)

ヴァイオリン協奏曲 二長調 Op.77

L.v. ベートーヴェン (1770-1827)

交響曲第7番 イ長調 Op. 92

指揮：奥 聡 (メディア・コミュニケーション研究院)

ヴァイオリン独奏：磐淵真里子

お問い合わせ：011-706-2493 (農学研究院 曾根輝雄)

# プログラム・ノート

人間と他の動物との大きな違いの1つに、過去の経験を具体的な情報として脳の中に蓄積できることと、将来のことにに関して予測したり具体的な計画を立てたり想像したりできること（言語能力のおかげであることが大きい）があるといわれています(Chomsky)。音楽演奏をすること、特に複数の人間による合奏をすることが可能であるのも、人間だけに備わったこのような認知機能のおかげであると考えられるようです。（本能によるさえずりや信号音の交換以外に）意識的に一定のルールを共有しながら「合奏・合唱」を行うことができる動物はおそらく人間だけでしょう。それぞれ別々の脳を持った個人が数十人（時には百人近く）集まって、一斉に自分が担当するパートの音を出し、それが有機的にシンクロしてひとまとまりの「音楽」を紡ぎ出すという現象は、よく考えてみると「奇跡的なこと」のようにも思えます。さらに、意識的に他人の合奏を聴いて楽しむという行いも、人間だけのものと思われれます。したがって、音楽を行うこと・聞くことは大変人間的行為と考えられます。そして、このような行為は（少なくとも直接的には）生物としての人間の生存にとって必要不可欠なものとは思われません。そのような生存価値の低い行為が、実に人間らしいということは大変興味深いことです。飯のタネにならないにもかかわらず、多くの人にとって音楽や他の芸術・文芸あるいはスポーツは、なくてはならない生活の一部です。アインシュタインは「死とはモーツァルトがきけなくなることだ」と述べたとか。

今宵は、ドイツ音楽古典の中でも、名曲中の名曲を2曲おくりします。長年かけてやっと書き上げた交響曲第1番のあと、わずか数ヶ月で交響曲第2番を完成させたブラームス。**バイオリン協奏曲ニ長調**もその直後、45歳の円熟期に書かれ、ライプツィヒでの初演も大成功だったといわれています。長大な第1楽章、優美なAdagioの第2楽章、軽快なロンドソナタ形式の第3楽章と、隙のない「立派な」音楽です。磐淵真理子さんが若々しい演奏を聞かせてくれます。

ベートーベンの**交響曲第7番イ長調**も、ベートーベンが「ノリノリ」で書いている雰囲気満載。何度演奏しても新しい発見があり、何度聴いても飽きが

来ない、また、初めて聞いた人もすぐに虜にしてしまうという魔法のような音楽です。第1楽章はこれから始まる曲の広がり期待させる序奏に続き、軽快なギャロップのような8分の6拍子の本体。これでもかという執拗なリズムの繰り返しが、聞いているうちに麻痺のように効いてきます。第2楽章は葬送行進曲風なのですが、ゆっくりとした歩みのような第1主題とそれに重なる性格の異なる対旋律の組み合わせの完成度の高さには感服してしまいます。第3楽章は軽快なスケルツォですが、いたるところにベートーベンの工夫が見られます。小節数のまとまりが時々不完全だったり多かったり、突然の f(フォルテ) や突然の p(ピアノ) もベートーベンの定番ですが、f かと思いきや p のまま、といった「想定外」の部分もちりばめられており、作曲者が面白がって書いている様子が目に浮かびます。そして、第4楽章、それまでの西洋音楽の常識を破り、ビートの強拍が小節の最初ではなく、2拍子の2拍目にあるという「ロックな」リズムの繰り返しではじまります（当時の聴衆は度肝をぬかれたのではないか）。同一リズムの反復、執拗なオスティナート（低音パートの同一音形の繰り返し）など、とてもねちっこいベートーベン先生ですが、その音とリズムの洪水に身を任せていると、不思議と気分が高揚してきます。

札幌ではまだ桜の便りを聞くには少々早いのですが、4月は毎年「再生」や「新しい出会い」の季節として、期待と不安が入り混じりながら心を新鮮にしてくれるものです。新学期を向かえ生活環境が大きく変わった方もそうでない方も、今宵、西洋音楽の古典に触れて、しばし心豊かな時を過ごしていただければ幸いです（演奏する方はかなり必死なのですが）。クラーク室内管弦楽団は、北海道大学教職員の親睦団体として、年に3回程度の演奏会を北大「クラーク会館講堂」を舞台として開催しています。月2回程度ウィークデーの終業後に練習をしています。一緒にやってみたいという方がおられましたら、お声をかけてください。

（メディア・コミュニケーション研究院 奥 聡）